

214



特
4426



六月
号

昭和十年
五月二十九日
購求

支那 二回

會話の
句切
止して下
付けるは

癸卯四月廿日

海水浴の客が出来る頃、成る、急な塩田
の松原へ西洋料理屋が出来た。
障子も細い筈で、昔の飛見屋の如く、
頭割つて、その下一行日西洋料理山
の松原へ西洋料理屋が出来た。
障子も細い筈で、昔の飛見屋の如く、
頭割つて、その下一行日西洋料理山
の松原へ西洋料理屋が出来た。
障子も細い筈で、昔の飛見屋の如く、
頭割つて、その下一行日西洋料理山

海の水は、松原の町、塩田の
水は、松原の町、塩田の
水は、松原の町、塩田の
水は、松原の町、塩田の
水は、松原の町、塩田の

支那入組

本放六
月号

一品料理 (新名)

海

参年四月廿九日
参年四月廿八日

會話の
向切
止して下さい

海水浴の客が出盛る頃、成る急な塩田
の松原へ西洋料理屋を出張
障子は細い縋で、
頭は割って、そのくそ、
重陽は、一品、
海の水は、行く、
誰か持ってきて行く松原
下町の、
手紙は、
江見水陰
大さき

昭和十年
五月二十九日
購求

其申すの、突然、その山に出来たのだ。
 □ 松のおもむき、松の木へ竹桿を挿して、
 て、それへ米糲粉の袋を懸へて、天幕の柱
 として流してある。立下り、自然木へ枝を打付
 けてあるのが、倉庫とともあるので、松子と合流
 根株へ板片を打付けたのを、
 中央草奥を置いて、そのまわりやが澤山
 挿込んである。
 □ すべては呼吸の、一、松の障子は着板
 ぞろぞろが、又日障子も成るのだ。

日の射し、
 □ 日の加減で、素手の方へ、
 断つて置くの、
 新来の客は、
 す。海水茶を、
 子無魂けあ、
 □ ぞろぞろ、
 ミルクヤコーヒー位で、
 行くのが多い、
 入替りを、
 け町は、
 専断の、
 障子は、
 障子は、
 障子は、
 障子は、

其申すの、突然、その山に出来たのだ。
 □ 松のおもむき、松の木へ竹桿を挿して、
 て、それへ米糲粉の袋を懸へて、天幕の柱
 として流してある。立下り、自然木へ枝を打付
 けてあるのが、倉庫とともあるので、松子と合流
 根株へ板片を打付けたのを、
 中央草奥を置いて、そのまわりやが澤山
 挿込んである。
 □ すべては呼吸の、一、松の障子は着板
 ぞろぞろが、又日障子も成るのだ。

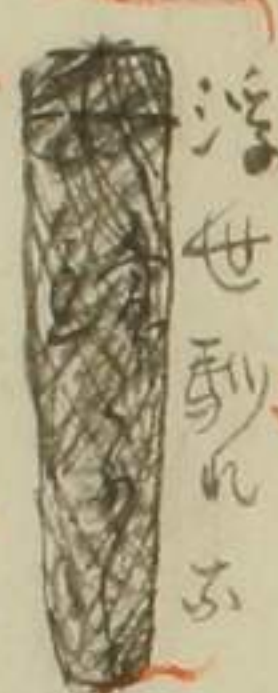
きれ 増合すは、これぞ、何の位 綺麗に...
の 知れぬい と見えぬ。

□ いや、それ計りでは無い。あの 招き は 4ヤン
と 居る。非難や、えんま、ま、で又着い。色

が けし、日、焦け、昨日、今日、
既、赤く、腐、通、餘程、
け、土、へ、あ、居る。白く、
少、治、風、の、洗、練、を、
□ ハイカラ 風、で、無、縁、東京、人、種、で、
り、小、さ、の、女、だ。

と、云、つ、なる。あ、入、出、毒、を、
わ、か、それ、は、
□ これ、が、山、エ、ター、
の、書、の、
可、片、
世、代、り、
る、の、で、
□ ね、
可、
□ ね、
可、
□ ね、
可、

と、云、つ、なる。あ、入、出、毒、を、
わ、か、それ、は、
□ これ、が、山、エ、ター、
の、書、の、
可、片、
世、代、り、
る、の、で、
□ ね、
可、
□ ね、
可、
□ ね、
可、



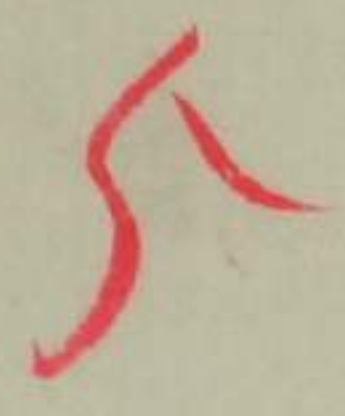
と、云、つ、なる。あ、入、出、毒、を、
わ、か、それ、は、
□ これ、が、山、エ、ター、
の、書、の、
可、片、
世、代、り、
る、の、で、
□ ね、
可、
□ ね、
可、
□ ね、
可、

了

日 容... 餘り... 我儘...
 日 あら、貴郎... 片遠慮... 深く方は...
 を判... 少々... 立はん...
 の。... 持... 入...
 と...
 日...
 人...
 大...
 日...
 日...
 日...
 日...
 日...
 日...

日... 我儘... 自分一人...
 日... 貴郎... 片遠慮...
 日... 少々... 立はん...
 日... 持... 入...
 日...
 日...
 日...
 日...

日... 我儘... 自分一人...
 日... 貴郎... 片遠慮...
 日... 少々... 立はん...
 日... 持... 入...
 日...
 日...
 日...



日... 我儘... 自分一人...
 日... 貴郎... 片遠慮...
 日... 少々... 立はん...
 日... 持... 入...
 日...
 日...
 日...

日... 我儘... 自分一人...
 日... 貴郎... 片遠慮...
 日... 少々... 立はん...
 日... 持... 入...
 日...
 日...
 日...

日...
 日...
 日...

日...
 日...
 日...

串刺し
梶野は、ズット鼻の、餘り風の通さるゝ知



石原子は團扇を持って後へ行って行く

梶野を閉ざしてあがらぬ。あつと仰有る隠敷。

水を酌んで顔をぶる拭き

あつと仰有る隠敷。

あつと仰有る隠敷。

あつと仰有る隠敷。

あつと仰有る隠敷。

るんわあめぬ

あつと仰有る隠敷。

梶野は脱いで帽子を膝の上で置いて撫で

あつと仰有る隠敷。

あつと仰有る隠敷。

あつと仰有る隠敷。

あつと仰有る隠敷。

あつと仰有る隠敷。

あつと仰有る隠敷。

梶野といふのは、静野縣の真家豊の次男で、

桂三郎と名を呼び、今歳二十二歳である。学

治員を先父に取つて、三田に下宿して居る事

は、あつと仰有る隠敷。

き又新録ふとり古坂取らるゝ。此間は互
同紙幣一枚置いておける様うを知らつれ。其時
きは、二五、サイダを解るれけであつれ。

□言ふ佳いお客は無くのてある。
□あッそれでは……氷菓子のけの何? 最少

しで出さるゝと石炭子けを張崩ぎを問うれ。
結核の何時にも氷菓子を始めの……と

櫻野は石炭子の顔を見上げれ。

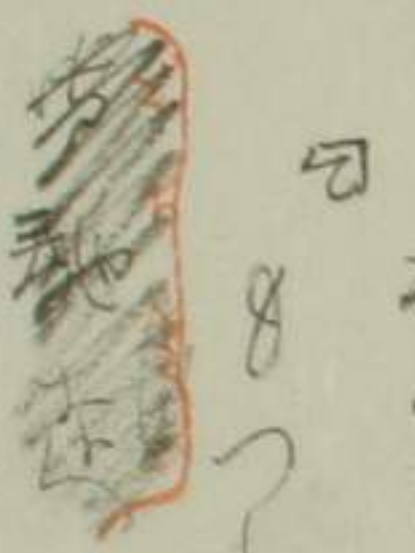
□い、え、幸拍うは仕子さんの道果が不完
全で……中子問う合ひ子さんめ。唯一つ

悪戯うそ見んですが、巧く困す……

□知れぬ人め
□おと、特別に私を……
□貴郎うは差上げれいと思つてはなすれ

んですよ

□お、さん、自言言わけて嬉し
□おつと、お馳走をね、澤山とと貴郎うはね



□さんお幸して……おんさんお叱るれやア仕

あいの

8

町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる
町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる

町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる
町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる

町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる
町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる

町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる
町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる

7

町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる
町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる

町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる
町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる

町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる
町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる

町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる
町では何んか云つて居るのを
見ると何んか云へる

あ

□ 神の心
氣をこめて守る様子を愛せぬわが心
張るにぞ氣を捕るの心と問はれ
到頭

三

日 町下はぬ 強盗さん 怒つてはいけぬ私
の言ふのは無いかね... 町では 酷い事
を云つて居る。兄弟がやア無くて 夫婦がッ
て、その野合の夫婦がッて... と 撫野は
言ひ難さ言はせぬ。
日 兄さんがダラシが無いのさあんです。本誌

仕様が無いんですのね。と 強盗さんは言て
下を向いた。

日 話して貰いたいのには 強盗さん、その田の事
情あんが。私、それを併し 聴きッて
仕あいつりあんが... と 撫野は
様を握る。とぞ言ひ氣な、バタリと右の手
を車の上で置いた。

日 え、話して...
□ 強盗さんは、すわ... 話して...
□ 兄は新米と呼び、自分とは 田っ草みである。

10
女

金がぶど盡き掛つたのを、今、東京へ帰
つた外で、暑いばかりで仕様が支那の
製法で習ひ、見ると、家庭料理法を基礎
として、西洋料理の一品賣りを始めて
見られるところも、漁業の掛かると、工
業も、不完全なものは、店を出して、
である。
□ だが、全編、兄は、台の舞が附いて居るの
で、まが、位、骨が折れる、の、
で、語り明し。

波多と、いふ、横濱の、生糸商の家を、
二人とも、少年時代は、幸福であつた。併し、父の
亡き後は、親類の悪い人が有つて、財産は、
程減じられ上、兄の新業が、敗落を、
始め、減茶
を、
し、
兄姉二人、切と成つた。
□ 其間、兄の新業が、脚氣を、罹つたのを、轉地
は、一方へ来た。自分も、脚氣を、
漁師の家を、問借りして、自炊生を、
れが、兄の病氣は、快く成つて、
持つて来た。

口 氣の毒(どく)めえ山と柳野(やなぎのの)は言(い)つれ。
 口 本統(ほんとう)も困(こま)るふのをすよ。お家様(いへさま)も
 と思(おも)つてわ井(い)スキを流(なが)すて中(な)か
 兄(あに)さんが吞(の)んでるふのをすのめ
 は張(はり)合(あ)ひの魚(う)も、其(その)眉(まゆ)の整(と)り
 語(かた)つれ。
 口 急(いそ)げ出(い)でし仕儀(しぎ)か魚(う)もね
 口 あんち兄(あに)さん、喜(よろこ)ぶんでる方(かた)が
 口 好(こ)いと思(おも)うんですよ。
 口 肝(かん)氣(き)は既(い)う若(わか)者(もの)ね、い、い、い。

10 終



口 如何(いか)も治(お)つていんせすよ!
 口 そんな薄(うす)情(じやう)な事(こと)を言(い)つて……
 口 言(い)ひなく候(まう)りませぬ。喜(よろこ)ぶの分(ぶん)として取(と)る
 て有(あ)り財(ざい)産(さん)を皆(みな)失(し)くしてつれの
 でありの……本統(ほんとう)も仕儀(しぎ)の魚(う)も兄(あに)さんです
 め。指環(ゆびわ)さんので、せいのね、ダイヤの有(あ)
 口 ねんてすか……
 口 ちやア今(いま)兄(あに)さんが死(し)んでる
 口 如何(いか)も……
 口 ……お家様(いへさま)は、ま、一人(ひとり)を……お家(いへ)さま



□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

□ 碁子の指を光る
 細が鮮明な目に入つて来る。

言ひつゝ、押へて居るのを
 強く握り締
 められ。一息で蒼く成りさう。
 □ 雨蒸子 依然として白い
 朝、て居るがア有りませんか

何故 強蒸さんは熱く
 して居るのかア
 言ひつゝ、押へて居るのを
 強く握り締
 められ。一息で蒼く成りさう。

又見え
 折角頂戴しすゝめ……
 接ひせしひきき……
 兄さんの午の逢ふに知へませぬ
 いぢやア無いの
 大おあてする
 ぢやア、私の様ふ同様者は入るゝ
 あら然らばぢやア無いんですか……
 然らば御い……

事は無^い熱^くの折^りを^も思^ひけ^りれ。
 曰^はす^し、其^の事^を人^間と^して
 山^の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 居^る……^と、其^の事^を人^間と^して
 ……私^は何^も勉^強し^て、学^校を^卒業^して、
 何^の職^を求^めず^には^ない^で、
 無^いん^だが、^と、其^の事^を人^間と^して
 分^かり^知れ^ない^んだ^と……^と

曰^はす^し、其^の事^を人^間と^して
 山^の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 居^る……^と、其^の事^を人^間と^して
 ……私^は何^も勉^強し^て、学^校を^卒業^して、
 何^の職^を求^めず^には^ない^で、
 無^いん^だが、^と、其^の事^を人^間と^して
 分^かり^知れ^ない^んだ^と……^と

曰^はす^し、其^の事^を人^間と^して
 山^の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 居^る……^と、其^の事^を人^間と^して
 ……私^は何^も勉^強し^て、学^校を^卒業^して、
 何^の職^を求^めず^には^ない^で、
 無^いん^だが、^と、其^の事^を人^間と^して
 分^かり^知れ^ない^んだ^と……^と

事は無^い熱^くの折^りを^も思^ひけ^りれ。
 曰^はす^し、其^の事^を人^間と^して
 山^の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 居^る……^と、其^の事^を人^間と^して
 ……私^は何^も勉^強し^て、学^校を^卒業^して、
 何^の職^を求^めず^には^ない^で、
 無^いん^だが、^と、其^の事^を人^間と^して
 分^かり^知れ^ない^んだ^と……^と

曰^はす^し、其^の事^を人^間と^して
 山^の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 居^る……^と、其^の事^を人^間と^して
 ……私^は何^も勉^強し^て、学^校を^卒業^して、
 何^の職^を求^めず^には^ない^で、
 無^いん^だが、^と、其^の事^を人^間と^して
 分^かり^知れ^ない^んだ^と……^と

曰^はす^し、其^の事^を人^間と^して
 山^の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 の中^に一^軒家^を立^て、自^分の^持山^を
 居^る……^と、其^の事^を人^間と^して
 ……私^は何^も勉^強し^て、学^校を^卒業^して、
 何^の職^を求^めず^には^ない^で、
 無^いん^だが、^と、其^の事^を人^間と^して
 分^かり^知れ^ない^んだ^と……^と

□ 天草市張りの倉庫に纏って漁納屋がある。

五

□ 磯原子は未だ午で顔を生得ふて居るが、死得ふ
知らぬ野分がけ時と長赤であつた。

卓上、微動を刻むの音か、滑り打つ櫓、経つて居る。
下、諺の櫓が兄さんわ、好
の夕の代は急ぐへて居る。

兄さんわ、ぬぬいかに包す来云つそ
わ、びびりて磯原子問ふ、おれは本統の
は、成るもさ、玉は儲くさけられ成るさ、いん
ぬ、それ程愛する人は、全くの賣女であられ
場合がある……併し……それ程愛する人わ
を、其方の股徒にして思はれ、景泰なる、母親の
母も、其方又、其女上、親の過許、股徒する
場合がある……併し……それ程愛する人わ
は、成るもさ、玉は儲くさけられ成るさ、いん
ぬ、それ程愛する人は、全くの賣女であられ
場合がある……併し……それ程愛する人わ
を、其方の股徒にして思はれ、景泰なる、母親の
母も、其方又、其女上、親の過許、股徒する

思はれるのぬ
日陰股徒ですわ。既うそんな他には有りませ

生業の竹籠を擴大した位の建設だが、
 所を [黒] 判読場は使用して居る
 兄姉が宿泊りする事は成つて居る
 唯一ッ消し残したカンテラの下で [黒] 居る
 [黒] 後の四洗りも [黒] 居る [黒] のハムセンが
 [黒] それを見ながら板壁 [黒] を [黒] した上で [黒] 四角
 [黒] 鏡を傾けて居るのは小まりの [黒] 色は [黒]
 白さうな [黒] 今は [黒] 常く成つて居る 白シヤツ
 一枚 [黒] で [黒] 大胡堂を挿して居る [黒] 煙しの煙が衰へて
 [黒] 金縛りの眼鏡を掛けて鼻下 [黒] 鏡の [黒] 時を
 [黒] 生やして一寸教育の有りさうな [黒] 顔
 て [黒] 居る [黒]
 日 おい、無子 [黒] 加減 [黒] 止し [黒] 止
 セッちやア本銃 [黒] と下等 [黒] 言方を [黒] 呼
 掛けた
 □ 波多新 [黒] 無子の兄が此である。
 □ びッて、寝る [黒] ついでに [黒] 今夜 [黒] 方
 □ 羽立日 [黒] じんあ [黒] 樂を [黒] 山と無子は見
 □ ころで [黒] 居る [黒] へ
 □ へえ、羽立日の事をお前は [黒] 考へて [黒] のか。

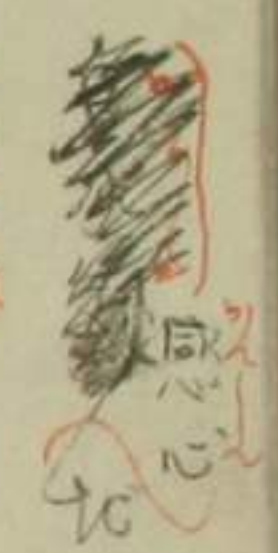
生業の竹籠を擴大した位の建設だが、
 所を [黒] 判読場は使用して居る
 兄姉が宿泊りする事は成つて居る
 唯一ッ消し残したカンテラの下で [黒] 居る
 [黒] 後の四洗りも [黒] 居る [黒] のハムセンが
 [黒] それを見ながら板壁 [黒] を [黒] した上で [黒] 四角
 [黒] 鏡を傾けて居るのは小まりの [黒] 色は [黒]
 白さうな [黒] 今は [黒] 常く成つて居る 白シヤツ
 一枚 [黒] で [黒] 大胡堂を挿して居る [黒] 煙しの煙が衰へて
 [黒] 金縛りの眼鏡を掛けて鼻下 [黒] 鏡の [黒] 時を
 [黒] 生やして一寸教育の有りさうな [黒] 顔
 て [黒] 居る [黒]
 日 おい、無子 [黒] 加減 [黒] 止し [黒] 止
 セッちやア本銃 [黒] と下等 [黒] 言方を [黒] 呼
 掛けた
 □ 波多新 [黒] 無子の兄が此である。
 □ びッて、寝る [黒] ついでに [黒] 今夜 [黒] 方
 □ 羽立日 [黒] じんあ [黒] 樂を [黒] 山と無子は見
 □ ころで [黒] 居る [黒] へ
 □ へえ、羽立日の事をお前は [黒] 考へて [黒] のか。



部集子は泣きさうな声を出して
 ぼいぢやアゆえか心跳するよ。翌日の朝まで
 はおぼるとまが揺つらんが。ぼいぢ減して
 早くおぼあいかよ。え、早くおぼようぢやアあ
 のと怪しく眼鏡をギラ〜一人です。れ。
 目 三んあ。おぼたければ早くおぼあさいよ。
 目を誘ふ事は無いでせう。
 目 おぼあつくよ。一人で先きへおぼろんち
 事も無いんぢや。
 目 泣きながら、それだけ。う井スヤが助かるん

20
 4145

言史
 目 兄えは本銃を酷い感とは小刀で磨
 いといで下されおぼいのわが、何んすも仕あ
 のゆえ
 目 小刀を磨いたって、そのテ容が肉を切
 るおけで、吾輩は無差別だ。
 目 言葉の用の方を混れを極めにする。顔と舌との
 目 つかり放題で世るといふ偽像と見える。
 目 えんお貴郎、魚茶お事を云つて……と



22+

可 羽を日、フライに作る。菓^{あま}入^{いれ}て、口^{くち}を^くる^るを
 せ^せら^らい^い老^{らう}翁^う、え^えく^く實^{じつ}つ^つマ^マア^アバ^バッ^ッて、雜^ざ菓^が
 一^い匹^{びつ}も入^いれ^れぬ^ぬえ。又^{また}漬^じ中^{ちゆう}然^{ぜん}と^と云^いつ^つて^てマ^マア^アガ^ガッ^ッれ。馬^ば糸^{いと}
 菓^がを^を煮^にく^くる^ると^と云^いつ^つて^てマ^マア^アガ^ガッ^ッれ。馬^ば糸^{いと}
 可 逢^あッ^ッち^ちマ^マア^アの^の出^では^はぬ^ぬえ
 可 馬^ば糸^{いと}ぢ^ぢや^やア^ア無^ない^いわ。それ^{それ}が^が本^{ほん}統^{とう}で^です^すわ。三
 月^{つき}の^の新^{しん}米^{まい}も^も拂^{はら}い^いで^で……^{……}以^も后^ごを^を始^{はじ}め
 ち^ちぢ^ぢ毎^{まい}日^{にち}拂^{はら}い^い高^{たか}の^の中^{ちゆう}に^に入^いれ^れる^ると^と云^いつ^つて^て
 フライの^の原^{げん}料^{りょう}を^を心^{こころ}配^{はい}さ^さす^す、[、]それ^{それ}で^でま^まの^の一^{いっ}文^{ぶん}

可 け、減^へる^るん^んで^です^すわ
 可 減^へつ^つた^たら^らも^も此^{こゝ}に^に割^わる^るは^はり^りだ。一^{いっ}杯^{ぱい}煮^にる^る生^{せい}
 を^を吞^のむ^むは^は白^{しろ}体^{たい}ぬ^ぬえ
 可 只^{ただ}で^で生^{せい}を^を吞^のむ^む方^{かた}が^が、[、]と^との^の位^{くらい}白^{しろ}体^{たい}は^はい
 の^の知^しれ^れぬ^ぬわ
 可 一^{いっ}お^お、[、]昆^{こん}ん^ん！[！]と^と思^{おも}い^いて^て様^{よう}々^々菓^が子^こ
 は^は言^い掛^かけ^けた^た。血^{ちゆう}を^を流^{なが}す^す今^{いま}も^も秘^ひめ^めて^て体^{たい}ぬ^ぬえ
 可 何^{なに}ん^んで^でえ
 可 一^{いっ}お^お、[、]昆^{こん}ん^ん！[！]と^と思^{おも}い^いて^て様^{よう}々^々菓^が子^こ
 は^は言^い掛^かけ^けた^た。血^{ちゆう}を^を流^{なが}す^す今^{いま}も^も秘^ひめ^めて^て体^{たい}ぬ^ぬえ
 可 何^{なに}ん^んで^でえ

甲 目とツと...
 乙 誰か聴いて...
 丙 誰か聴いて...
 丁 誰か聴いて...
 戊 誰か聴いて...
 己 誰か聴いて...
 庚 誰か聴いて...
 辛 誰か聴いて...
 壬 誰か聴いて...
 癸 誰か聴いて...

甲 誰か聴いて...
 乙 誰か聴いて...
 丙 誰か聴いて...
 丁 誰か聴いて...
 戊 誰か聴いて...
 己 誰か聴いて...
 庚 誰か聴いて...
 辛 誰か聴いて...
 壬 誰か聴いて...
 癸 誰か聴いて...

日 待つておくれ...
 日 急立てれぢや有りせんか
 日 ヤ少し相談が有らんぢや
 日 相談ある時三つを下さ
 日 偶には兄貴の酔りて居る
 日 酔い... 文が都合が好い
 日 酔い... 酔い... 酔い...

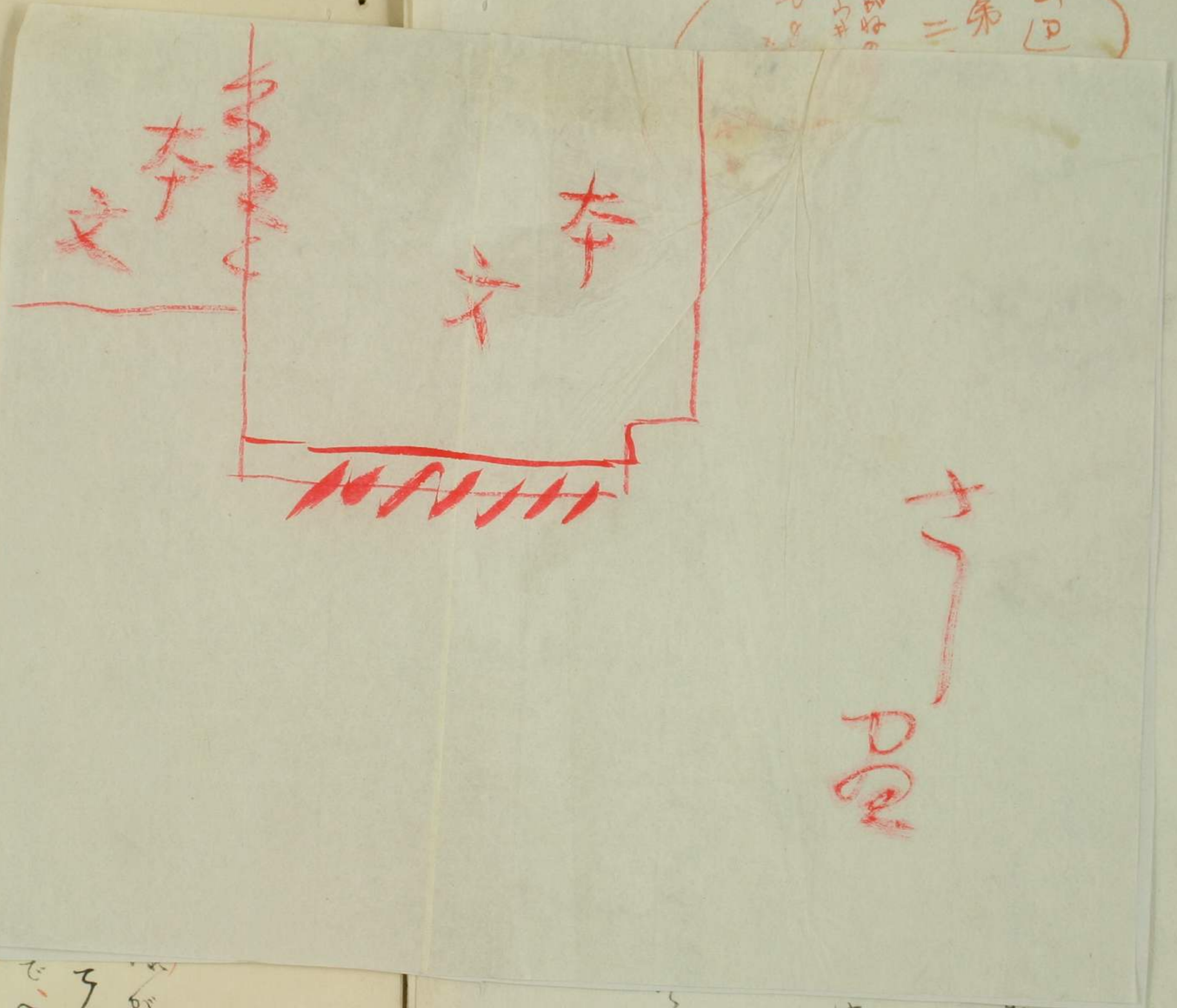
日 一歩は言はるゝ
 日 それで... 既...

日 実めは音が... 誰だつて...
 日 何んぢや又... 狐...
 日 今...
 日 あの方... 偏...
 日 ああ...
 日 五...
 日 籍...
 日 兄...

29

28

第 二 卷 第 四 十 一 号



日 日 日
 何んを
 得ぬ
 四五百円
 又
 引出
 子供
 早

何んを
 得ぬ
 四五百円
 又
 引出
 子供
 早

何んを
 得ぬ
 四五百円
 又
 引出
 子供
 早

ぢやあは。美しと云ふのは
 前操と

着
 け
 ら
 ぬ

29

幸の... 僕... 持... 見... 何... 云... 云... 何... 云... 何... 云...
 僕... 持... 見... 何... 云... 云... 何... 云... 何... 云...
 僕... 持... 見... 何... 云... 云... 何... 云... 何... 云...
 僕... 持... 見... 何... 云... 云... 何... 云... 何... 云...
 僕... 持... 見... 何... 云... 云... 何... 云... 何... 云...
 僕... 持... 見... 何... 云... 云... 何... 云... 何... 云...

28



ぢや... け... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼... 焼...
 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕...
 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕...
 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕...
 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕... 僕...

中 ぢやア昆さん、本氣を今の事をも云つたので
すのらと碓煮子は言しよが、新装の顔をも

兄さんは非常中、酔つてゐるんですわと
言ひつゝ、喜ぶまゝ碓煮子は團扇を傷かす
中 驚き目、酔つた時が本音を吐く
で、山と云ふ、又呷つた、既に空に成つた
了つたので、洋衣を置いて、今度肉刺を
取つて、サラダを空刺しれ。

七つ

（喜）服んで行く、望む、たいと云う
うんが
中 マア……昆さん！
中 あア、俺が肉刺を、持たして、暑
るまでの事は、仕ふくつて、お前、お前が何
れまどい、賣女で居て、二人の子供あつか
無、いふんで居て、酒肴の自らが、無
んで居れば、向ふは、恋は、神聖と
つてゐるんだ、巧く、ちや、午内、作
う、ふさん、ぢやア、お前、

曰 併し人間てえ ~~者~~は油揚げがアアのえ、
 ぢやあふ。蒸し詰めて見るべし。人間の
 血管を空気に通して呼吸。そんな結構なもん
 がアアとい。呼吸の押詰つれ。振えの程度
 日書して、考へてくつちアア。再自己場合子
 曰 べつて然るゝあんですの
 曰 や、それは空相の見だよ。酒で生息し
 はんぢアアい。生息の酒あんぢ
 曰 ぶつちーしー。大しれ毒るは有りせん

研究の題目は魚倒像也
 曰 あ、本鏡の貴郎は……這んか魚茶を
 言ふ方では無かつたのをすかめえ
 曰 酒も言ふよ。上る方ぢアア無かつたの
 曰 は……と。附葉氣のさひを〜れ。
 曰 妻どう考へて。貴郎の斯う成つてお
 ろらさつたのは酒の爲かと思ひますわ
 曰 又の始まるに。耶蘇坊主の眞は既う
 唐と何つそぬ。實際。月、肉餅の出る〜
 曰

問てゑる者は、その……
 既うらんふ事は、聴きたく有りやせん
 小
 ぢやア云けぬえが、併し磁漆子、好いぢや
 ア無いが、存続……え……相埒が……
 此ア又元の家の壁も、作らぬんぢや。二人
 の子供も引取らぬんぢや。然し……
 お前の阿母さん、若か軽く成らんぢや。そ
 軽く成る処ぢやア、お前の……
 引取らぬんぢや。樂隊居を喜ぶさ……
 好いん

豚の代り、まの肉を切つて、客に食はせ
 様と成さるんぢや。い、え、然しあんぢや。ま
 をおの撫野、接し……お金を取れぬ
 御有のですぬ。羊か人馬を仕とらぬん
 です。まを……名の有る女と、同し、兄て居
 ぶ……
 ぢやア然し……茶……仕方のえ
 ぢやア……
 茶……
 そんぢや、ま……考へるあ……人

□ いわ! 然! 心の中心は叫んで居る。
 □ そんなに不意に操は世を去ると立派に
 断つて置いて、世は私を去る。行かぬ。
 □ 成る程、道に居る。如何に。
 □ 其所を自分には、未だ知らぬ!
 □ そんな複雑な操を持つて居る女は無
 いわ! 然! 心の中心は叫んで居る。

氣の毒なる感と居る。
 □ 最後、答へは如何に。仕難くいつか、
 新人が帰つて来る。
 □ 櫻野は如何に。孤獨とと、排拒さる。
 去つて、つれづれの事。
 □ それ等の有様を思ふ際、バあ、今、
 一そ、あの人と、交際を、
 出せと、説く。見ると、
 櫻野と、其の、
 あつた。如何に。

□ 海の方も大分浪が騒がしく吹つて来た
 □ 一夏の内は、赤が水田の畦の方が優勢で居る
 □ 松原の緑路

ル

人などとは新築は全上つた。
 又、論議を繰りかへ

□ 事百倒と見て...
 又子供が...
 甘え...
 下...
 既...
 既...
 既...
 既...

46

□ 受けた縁故と云ふので、他の店を見捨て
 来て居られたのでありん。

□ 世後と三度、客を連れて来て居られた
 ん。

□ 後、一人下来て泊り行く様子成つた。
 □ 間も無く、~~今も~~ 腹の痛つた。

□ 世時、人々、新嘉坡は、余の連れの社律
 をして居た事があるのを、教へられた。

□ 既に、何事も出来なかつた。

□ 世後、通譯官として、従軍した。

□ 波多谷新嘉坡、~~横濱~~ 横濱の商會より通譯として居られた。

□ 立派な紳士風な様子で、~~外~~ 外資の着
 紳士を案内して、箱根の藤屋ホテルに泊り、
 であつた。 商業学校。教師として居た。

□ 世頃、父は死んで居た。母と姉と三人で温
 泉村で雜貨店を開いて、主として、~~外~~ 外資の人を相
 今、一と、商賣をして居た。

□ 新嘉坡は、~~同様の~~ 同様の紳士を引連れて、東を、澤山買
 物を、して居られた。それは、曾て父の教へを

41

越前ツルギは一家を成なした。ゆがけ時ときが没なる
 家の全盛時代ぜんせいじだいであつた。
 □考かんがへて見ると新義しんぎはわし悪あくいりな無むの
 つれつれ（自分自分が全く全く新しいもの）
 活あき間まをくると母ははを送おくつて、家の経緯けいゐは何なに
 か何なにをいふかあつた。
 □世間よこしま、次つぎの子こは出でるが
 □その最後さいごの病びょう中ちゆうの、新義しんぎは儼げんしく化け
 で済すむられしめ。酒さけ、強つよく成なつたのは、時とき
 分ぶんりであつた。

い。あ。い。

といふ事ことも知らぬ。有名有名な文士ぶんしの家いえは
 家食けあきして居ゐるといふ事ことも知らぬ。新聞記しんぶんき
 者ものもそれと知らぬ事こともあつた。
 □暗くらい方かたは、あつた首くびを突つき入いれ、
 ぐ倒たふすも正ただし入いれ、履歴りやくも有あるのを、と
 んふ事こともいふ人ひととは思おもはなかつた。
 □又また世間よこしまは、いふ悪あくい人ひとでもあつたのは
 事こともあつた。
 □問ともふく新義しんぎは、東あづま支し那なのま配けい人と成な
 つたので、それを機舎きしゃは山やまの店みせをろつた。

93

□ 中の光の日の影か。
 □ 繁子は何の何を分るく成つて危く
 世所は倒ん様とれ。
 □ 吃驚して田の端をまねて松原に引返
 ね。
 □ かがき暑い納豆の中に入ると暑気は如何
 したか。
 □ 完きつた松の本に立身をして
 あせまのびた又考へてこれか。柳野の
 泊つて居るお宿をまを走つたものか。然

賭博を今を止すか。
 □ 詰り詰り結果として自分操作を
 ぶせ様とするとは何んか。人非人だ。
 □ 自分で動脈を承認して掛る程自暴自
 棄の陥つて居るが。それが現在の良人だ
 と思ふ。恐ろしい。今も戦慄せしむは
 存らぬ。
 □ 然るも柳野の救はれ様か。
 □ 今晴いものは何方の蛙か。

人の新非傳で、
薄情の地端を
全活に到れて居る。
そののち、華堂を人の
生命の輕い事を見
到れて居る。自分だけ
助かりたい。子供を
踏躑—
正つた満洲人の醜態
を澤山見て居る。其の

險々しく、生活の腹を、
喜べぬものか。
二人の母親といふ事を、
人を見抜くのは、
ふ獸的人を振捨てる、
心も。

□ けれども、
て来る事は、
心も。

□ 又阿母さんの事を、
二人の子供を捨てる、

阿母さん、
取つて居る。
時分不呈者
さんか。

あ、妹の事、
□ 這んち、
三越、
と、
何故、
何故、
何故、

□ 又、
又、
又、
又、

□ 又、
又、
又、
又、



可
研子！
何処へ行く
研子さん！
研子

九

心であらうれ。
 □ 遠く 夢を 何れを 教へて 答ふるを 有る
 □ 夢は 聴きぬ
 □ 斯ういふ 場合は 夢を 何れを 有る
 □ 身を 願ひ せしめ せしめて いらくと 松の 雨路が
 落ち 散つれ。

□ 遠く 夢を 何れを 教へて 答ふるを 有る
 □ 夢は 聴きぬ
 □ 斯ういふ 場合は 夢を 何れを 有る
 □ 身を 願ひ せしめ せしめて いらくと 松の 雨路が
 落ち 散つれ。

46

声鳴くは様だ。
 □ 聲子は思はず。
 □ 此方ですと 呼ぶれ。
 □ 紅んぞ。 耳所は居る。 つかやさつ、
 □ 何処へと行つれと思つて……
 □ 海はと思つれ。 山
 □ 海へ行く。 身を捨てる。 俺の言つた通りの方
 へ向いて…… 山

45

んと呼ばりながら、 納金の中…… 新築の
 出さず。 山
 □ つい、 前を通りながら、 窓の着のぬ。 眼鏡を
 脱いで、 宝珠のりか、 其儘 起きて来たのをあき
 強き子は黙して、 其様子を見て居る。
 □ 無！ 山
 □ つい、 先きで呼ぶれ。
 □ 止留つて、 小時分へて居るが。
 □ 山と 叫んで、 儘 海の方へ、 一歩子走り出
 した。 折即 彼方では 海鳴く…… 山
 □ 三三

44

□ 西村が 強き け 朝は 深く 掛つて 海を見えぬ
 田と見えぬ 松原の 松も 近くは 黒く 遠くは 灰
 程 薄き 霧も 消えぬ 居る
 □ 其中の 笑聲が 起つた
 たり 唱る歌が 起つた
 □ 一人で 居る 二つ 車
 子供を 抱き 走らせた
 □ 昔より や 又 海沿い 群る 客が 居る
 あゝ

□ 家族の 一團が 曉まで 子供を 中
 心して 通るのを 店、支店を 見
 破る 子は 一杯 成つて 来た
 □ 人の 通つて 行く 砂路が 夜 雨
 粒を 踏む 下 乾いた 砂を 入
 居る 松の 根 居る 顔の 苦み
 より 成つて 居る
 □ 自分の 浴衣も 薄汚れて さま 見
 思つて 破れ 居る 子は 着替
 て 居る 世 儘で 居る

□今朝は化粧をすゝ氣、
 □魂と撫子け下は告る、
 □二人の子の因といふ事を知れるわ
 □新義は昔が懐納屋で眠つて居る、
 □一時近くあるふりには起きて来たの
 □料理の下ごしらへは大概朝の内、
 □食卓用の板張の一部は挽肉器を
 □豚の肉片を漏斗形に入れ、下の把手

□をギリギリと始め、下の口から
 □粉練は、白の上をまわす、
 □を見て、思ひ下、
 □自分の腕を挽肉して居るのを
 □今日も、概野は来て、
 □今夜も、新義は言出すわ、
 □喜ぶ者、
 □が、
 □半リ、
 □半リ、

